



PRESENTED BY

清水マリコ

MARKO SHIMIZU

ILLUSTRATION

ZEN

ORIGINAL WORK

Key

リトルバスターズ!
Little Busters!

1

Prologue



Little Busters! 僕らのチーム名

CONTENTS

Prologue	003
Mission1 彼の帰還	015
Mission2 べいすぼーる、しません?	051
Mission3 星に願うこと	115
Mission4 EVOLの予感	203

イラスト：ZEN

カバーデザイン：上田デザイン室

見えてきた。

少しずつ、あの場所へ近づいてく。

白い校舎と、グラウンドと、体育館。フェンスに沿って植えられた緑の樹。学園の景色はどこも似ている。

だけど、ひとつひとつがその学園の生徒には——生徒だった者には特別だ。日差しをうけて、あたり一帯がまぶしく見える。

「懐かしいなあ……」

正門から見る建物に僕は早くも胸いっぱいだ。

なじみ深い空気を吸い込むと、あの日々が、たちどころによみがえる。

思い出に導かれるままに、僕は校内へと進んでいった。

休日のため、生徒の影はまばらだった。

が、時折すれ違う制服姿に、僕の胸はきゅつと甘く締められる。私服の僕を、あれ？という目で見る生徒もいるが、胸の許可証を見つけると、すぐにそのまますれ違う。

僕はグラウンドの前に来た。かつて僕——僕らはそこで遊んでいた。マウンドに立ち、あるいはホームベースを踏んで、疲れたときには脇のベンチに座っていた。

——よし、いいぞ！ 楽勝だぜ！

——こらー！ なにすんじやつ！ ふかーつ！

——ふあいんぶれ。とれたよ。

——ふん、造作もない。内野くらい越えろ。

——うおりやあああああーっ！！ そりやあああああーっ！！

——めーん！

野球だよ、と、回想なのに笑ってしまう。

そのくらい、賑やかな声が間近で聞こえているようだ。

僕は全力で遊んでいた。全力で騒ぎ、楽しんでた。

いまは誰もいない廊下を歩く。心のなかでばたばたと慌ただしい足音がする。

——逃げるっ！

——ええっ!?

——だって、捕まったら大変だよ？ もうなんというかお説教されるわお説教されるわお説教されるわ……。

きみがイタズラばかりするからじゃないか。なんで僕まで一緒なんだよ。

大きなボンボンのついた髪、アニメみたいにくるくる変わる豊かな表情。

僕は一人、思い出のなかではしやぐ彼女に抵抗する。結局いつも巻き込まれたけど。

廊下の突き当たりの階段をあがった。

踊り場から屋上へ通じる扉。ハンドルに手をかけると、意外にも鍵はかかっている。重い金属の音とともに扉があいた。

「うわ、まぶし……」

ふりそぐ光に目をほそめる。コンクリートの照り返しがまぶしい。足下からほのかに熱が伝わってくる。

もう少し早い季節だと、日も柔らかくて気持ちいいんだけどな。

——私、ここベストブレイス。

また声がする。

春の日差しよりもおだやかな、ほんわかした優しい声とほほえみ。

一緒に食べたお菓子の甘い香りが、いまでも近くに感じられる。

——好きなところだから、ここに来るの。

なんとなく足を運んでしまう好きな場所。その空気を感じると落ち着く場所。

僕にとつて、そんなベストブレイスはどこだと答えたのだっけ。

フェンス際に立つて風を感じた。それからすぐ下の校内に目をやった。

ああ、あそこは。

穏やかで明るい屋上から、涼やかな木陰を求めて中庭へ。

そこはひとときわ静かだった。校舎と校舎に挟まれて、運動ができるほどの広さもなく、集まっておしゃべりをしたくなるほど明るくもない。

芝生と木だけの、ただの吹き抜け。ひっそりとした目立たない場所。

でも、だから、ケヤキの下に腰をおろすと、誰にも見つかることのない、自分だけの隠れ家にいる気持ちになれる。

耳をすますと、静かに本のページをめくる音。

そして囁き。

日に晒された白い傘の下、そっとほえむ儂げな唇。

——これはわたしの大切な本です。わたし、そのものが書いてある。そんなふうにさえ思える本なんです。

風が吹いたわけでもないのに、空気がすこしひんやりした。

——あなたは、それを知りたいですか？ わたしを、知りたいと思うのですか？
僕は……。

ピアノの音に呼ばれた気がした。

音楽室？ いや、違う。校内のざわめきにまぎれるように、スピーカーから流れる音だ。
僕は校舎の一角へ向かった。茶色の厚い壁に囲われた、小箱のような放送室へ。

みつしりと重い扉をあけると、小さなボタンやレバーがたくさん並んだミキサーがある。中心にボツリとスタンドマイク。

狭いブースのまた片隅に、細長い布をかけられたものがある。電子ピアノだ。なぜここにあるのかも謎だという……あれが僕をここへ呼んでいた。

また聞こえる。

初めて聞いたときから懐かしく思えた不思議な曲。だけど、聞いたことがある人はいない曲。
——私が作った曲だからな。いまタイトルをつけた。

長い指をほつそりとした顎におき、深い色の瞳がすつときらめく。冗談なのか本気なのか、僕を惑わせる神秘的な瞳。

タイトルは、僕に捧げる綺想曲だ、という。

もつたいない。みんなに聴かせたいような……でも、教えたくないような……。

この学園に普通と少し違うところがあるとしたら、寮が併設されていることだ。

原則、学園の生徒たちはそこで共同生活をする。

僕にとつてもそこはたしかに「家」だった。

校内から、校舎と道ひとつ隔てたそこを眺める。

朝はおはよう、夕方にはまた明日。でも、夜中に誰かの部屋で謎の集会が行われることもめずらしくない。

——ぐつもーにんえぶりわんはぶあないすでいーつ。

亜麻色の、優しく光る長い髪がふわふわ揺れる。白い帽子、白いマントに包まれた、独特の装いの小さな姿。

でも、いまは朝じゃないし僕はひとりだよ。

つい苦笑したが、心のなかはさわやかに甘い。髪といい鮮やかな青い瞳といい、見た目はあきらかに異国のそれなのに、家に帰ってきたときのようにほつと安らぐ。

日本的、家庭的といえそうなんだけど……。

——わふ。

子犬つぽい、というほうが当たってるかな？

あたりはいっそう眩しく見えた。空気は熱を帯びていた。

ここにはなにもかもがあった。

笑いも、怒りも、ときめきも、悲しみも……僕のすべてがここにあった。

にやう。

細く甘い、胸をくすぐる気まぐれな声。

にやう……。

思い出じやない。たしかに、子猫の声がする。

声のするほうへ早足で向かった。白い猫。そうだ、この猫は白いに違いない。

校舎をつなぐ渡り廊下だ。いつも、あの片隅で遊んでいた。

「――」

子猫の名前を呼ぼうとした。あの場にたくさん集まっていた、名前だけは偉そうな猫たちのなかでも、とびきり可愛く、偉そうな子猫だったつけ。

でも。

そこにいたのは僕の知っているあの子じゃなかった。後ろ足に白い長い足袋を穿いた、僕の知らない子猫だった。

足袋の子猫は金色の目でぼくを見た。やあ、と僕は笑って片手をあげる。

きみはいっからここにいるの？　ここは静かで、角のところに午後の日が集まるようにあたたかいよね。いつも、一人でここににいるの？

しゃがみこみ、子猫に手を差し出した。

足袋の子猫は僕の指を見て、とくに美味くもなさそうだと判断したのか、フイと顔をそむけて行ってしまった。

「残念」

僕は声に出してつぶやいた。やはりたしかに時は流れている。白い子猫もおとなになって、すでにここにはいないのだ。ひよつとしたら、いまの子猫が、その子どもかもしれないけれど……。

――ちりん。

はつとした。

これは思い出、それとも本当に鳴る音なのか？

ちりん。

涼しくて、甘いようでもすっきりと澄んだ響きの音。

息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

でも追わない。追いかけない。僕は待つのだ。思い出なら、この音はやがて消えていく。そ

うでないなら。

ちりん……。

少しずつ、この音は近づいてくるはずだ。

思い出は、ゆうべ見た夢と似ている。

語ることはできても、そこに帰ることはできない。

時がすぎれば、自分のなかで、現実と区別がつかなくなってしまう。

ちりん。

風が舞う。

思い出のなかで、僕はひとりじゃない。





VA文庫

リトルバスターズ！ ①

ぼく めい
～僕らのチーム名～

2013年 10月30日 発売予定

■著	者	清水マリコ
■イラスト		ZEN
■原作	作	Key
■製	作	株式会社パラダイム

©MARIKO SHIMIZU ©ZEN ©VisualArt's/Key
Printed in Japan 2013

VA020

仲間がいた。
グラウンドに、教室に、屋上に、放送室に、中庭に、学生寮の前に……いたるところに彼らの影を見つけれれる。
それは、たしかにあつたのだ。
この景色、この空気、この場所は、僕たちの楽園だったのだ。
—— ちりん。
だから。
きみの声を忘れない、涙も忘れない。
これから始まる。ここから始まる。
あの日からの、僕らの物語が。